

変形性膝関節症による膝可動域制限を呈する 症例に対する鍼治療の効果

山口 成広, 井上 基浩, 中島 美和

臨床鍼灸学講座

【目的】変形性膝関節症（膝 OA）による膝関節可動域（ROM）制限を呈した 1 症例に対して鍼治療を行い、ROM の改善を認めたので報告する。【症例】66 歳，女性。主訴：左膝関節屈曲制限。現病歴：X-3 年頃より左膝痛を自覚。X 年 3 月，左膝関節屈曲制限を自覚。整形外科を受診，膝 OA と診断され，膝関節鏡視下デブリドマンを施行するも ROM の改善を認めないことから，鍼治療を開始。現症：膝関節屈曲 ROM：右 130°，左 90°。安静時痛（－）。左膝関節屈曲時に大腿前面部に疼痛（＋）。左大腿四頭筋の過緊張（＋）。術中所見：癒着，関節内異物（－）。鍼治療：過緊張筋に対して，1～4 診は単刺術を，5～20 診は運動鍼を行った（5 日／週，計 20 回）。評価：毎回の治療前後に左膝関節 ROM（他動）を計測した。【経過】2 診目を除く毎回の治療直後において，ROM の改善を認めた。5～20 診においては 1～4 診よりも高い直後効果が見られた。【考察・結語】本症例は膝 OA に起因した筋性拘縮による ROM 制限であり，このような症例に対する過緊張筋への鍼治療は有益であり，運動鍼は単刺術と比較して高い効果をもたらす可能性があると考えた。

トリガーポイント検索方法に関する検証 —効果的な鍼治療を行うために—

小田切 耕平, 井上 基浩, 中島 美和

臨床鍼灸学講座

【目的】トリガーポイント発現筋の有用な検索方法を明確にすることを目的として，当該筋への負荷のかけ方の相違による疼痛の誘発状況について検証した。【方法】慢性的な肩凝りを有する被験者 16 名を対象とした。症状のある頸肩部上でトリガーポイント発現筋を同定した後，全ての被験者に当該筋を 1. 伸展，2. 自動的に収縮（自動収縮），3. 抵抗を加えて自動的に収縮（抵抗収縮），4. 短縮させ，同定した部位に誘発される疼痛の程度を Visual Analogue Scale（VAS）を用いて記録した。【結果】当該筋を伸展した際において他の負荷方法と比較して有意に高い値を示した（vs. 自動収縮： $p < 0.001$ ，vs. 抵抗収縮： $p < 0.01$ ，vs. 短縮： $p < 0.0001$ ）。抵抗収縮は短縮との比較では有意差を認めたが（ $p < 0.05$ ），自動収縮との間には有意差を認めず（ $p = 0.44$ ），自動収縮と短縮の間においても有意差を認めなかった（ $p = 0.11$ ）。【考察】本研究の結果から，トリガーポイント発現筋を決定する際は当該筋を伸展させて検索する方が，よりの確に同定できる可能性が示唆された。